

正常解離に関する研究

—最早期記憶とTATとの比較から—

Study about normal dissociation
—comparison of TAT and Primary memory—

崎山 ちひろ
Chihiro Sakiyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 正常解離, 空想, TAT, 最早期記憶
Key words : normal dissociation, Imaginary, TAT, Primary memory

1. 研究目的

ショックなことが起こった時や過度のストレスを感じ続けるなど、自分の心に堪えきれないほどの負担がかかる体験を強いられた時、自分を守るためにその出来事を忘れて「その体験をしたのは自分ではない」と、違う自分をつくりだしたりすることがある。これらは「解離」と言われる心の働きによって生じるもので、解離の機能が働くことによって、本来一貫性や連続性をもっているはずの記憶や情動、知覚、アイデンティティーが一時的にまとまりを逸してしまうことを解離現象という(榎本, 2014)。

解離には病的な解離と正常な解離があり、病的な解離は、解離性健忘、解離性遁走、解離性同一性障害、離人症性障害、特定不能の解離性障害などが含まれる解離性障害を指し、これらは日常生活に支障をきたすもので治療が必要なものである。一方正常解離とは、授業中に空想をして授業が聞こえていなかったり、読書やある作業などに周りの音が聞こえないほど没頭するなど誰でも体験しうるものであり、日常生活に支障をきたさない程度のものである。また中塚(2009)や岩宮(2009)らは臨床場面でもみられる軽度の解離について説明しており、これらの特徴としては、自分の体験を自分のものと意識しないため、自分が傷ついているということや罪悪感等を感じられない(岩宮, 2009)ということが挙げられる。このような解離は近年よくみられるようになってきているという。

この近年注目されつつある正常人でも体験しう

る解離についての理解を深めることによって、正常解離の体験を持つ人の理解だけでなく、臨床場面でのクライアントの援助に役立つと考えられる。また、従来解離があまり扱われてこなかった精神分析でも、近年は岡野(2015)の言う「弱い解離」に注目し心理療法で扱う上で重要だとされていることから、正常解離の研究は必要不可欠だと言える。よって本研究では、正常解離の理解を広げることを目的とする。

2. 研究実施内容

(1)方法

正常解離の研究は、近年になってされつつあるが、先行研究の大半は尺度を用いた量的分析によるものである。量的分析は客観性が高いと思われるため、不可欠な研究であるが、インタビューで詳しく体験内容について聞くこともまた重要であると思われるため、今回はインタビューによる質的データを収集し分析した。

また、正常解離を研究するにあたって正常解離の体験だけに焦点を当てるのでは不十分と思われるため、正常解離との関連が示唆されている空想に焦点を当て、空想の内容や空想に関連するものも同時に調査しその内容を比較検討した。

本研究で用いたのはTAT主題統覚検査と最早期記憶である。TATは被検査者に絵刺激から空想をさせ、そこからパーソナリティを判断するものであり、最早期記憶は、今の自分のパーソナリティにあった記憶を空想的に想起するもののため、2つとも空想に関連があると考えられるためである。

調査対象者：都内 O 女子大学に通う大学生 18 名

調査時期：2016 年 7 月～10 月

調査方法：学内において調査協力者を募集し、研究内容を説明したうえで調査協力に同意を得られた人に個別にインタビューを実施した。インタビュー内容は、TAT 検査(第 1 図版のみ)、最早期記憶、普段する空想の内容、正常解離の体験の 4 つを聞いた。正常解離体験についてのインタビューは、舩田(2008)が作成した正常解離自由記述質問紙の質問項目に則って行った。

分析方法：KHCoder を用いて、正常解離と TAT・最早期記憶・空想の関連について検討した。その後、調査協力者ごとに各インタビューの内容を質的に分析した。

(2)結果

KHCoder での対応分析の結果「娯楽性の程度」と「非現実性の程度」という 2 軸を設定することができ、軸の位置からは正常解離は娯楽性がやや高く非現実傾向な対処だということが分かった。また、他の 3 つの概念との位置関係を見てみると正常解離は、空想と TAT、最早期記憶の中間にあることが示唆された。また、正常解離の内容をみてみると、正常解離は問題に対して現実的に取り組むというより、問題と向き合わなくて済む方向に対処するという特徴があるようだった。

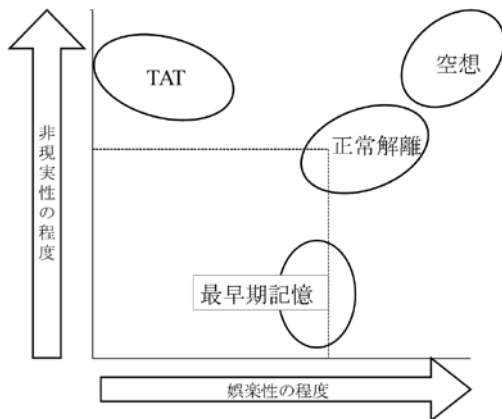


図1 KHCoder対応分析結果の簡略図

空想の内容からの分析では、空想の内容の現実性の程度を軸に 5 つのカテゴリーを作ることによって正常解離の体験と空想カテゴリーとの関連は見られず、人によって正常解離の使い方も体験の種類も異なることと TAT、最早期記憶の内容を比較した結果、正

っていた。しかし、TAT と最早期記憶の内容と空想の内容には一貫した関連が見られ、空想のカテゴリーごとにその内容の空想をする背景を推察す



図2 現実性の程度における空想のカテゴリーの配置

ることができ、これらの内容から、調査協力者たちにとって空想は、現実生活のサポートをしたり自己効力感を高めるもの、不満や葛藤を空想で補うことができるものであり、空想することによって日常生活とのバランスをとっているという可能性が示唆された。

3. まとめと今後の課題

正常解離の体験、解離的な対処については「現実から離れる」という特徴がみられた。彼らは空想をしたり何かに没頭・集中したり一時的に現実から離れることで、ずっと問題を抱えているよりは自分に負担がかからないように対処しているものと思われる。それによってストレスの多い現代社会において適応的に生活できているものと思われる。

本研究の課題は、対象者のパーソナリティの健康度を測る指標をとらなかったため、空想の現実性と健康度の関連が分からなかったことがあげられる。今後の展望としては、本研究で調査対象としたのは非臨床群だけだったが、臨床群の人の体験する正常解離についても調査することで、今回の知見を活かした、より臨床的に有用な知見が得られると考えられる。

4. この助成による発表論文等

なし

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 B (DB2817) を受けて行われた。